

UNDERSTANDING RISK GLOBAL FORUM にブース出展 および テクニカルセッションにて発表を行いました (2024/6/17- 21)

テーマ：自然災害リスクへの理解を深める、「伝統」「革新」「強靱性」

会場：兵庫県姫路市（アクリエひめじ）

URL：<https://www.forum.urpartner.io/event/bc848bef-4b10-470b-a4ac-d6c4f0ac0bd7/websitePage:33a71752-d4e6-4906-84c7-84693869135f>

2024年6月17日から21日の日程で、アクリエひめじにおいて世界銀行・防災グローバルフォーラム（UR2024）が開催されました。URとは、「Understanding Risk（リスクを理解する）」の略で、災害リスクやその削減について話し合うフォーラムであり、2年に1度世界各地で開催されています。今回は、2025年に阪神淡路大震災30年を迎える兵庫県姫路市において、アジアで初めての開催となりました。アジア諸国をはじめ世界135ヶ国から1500人以上が参加し、1週間にわたりさまざまな形で活発な議論が行われました。

当研究所では、災害レジリエンス共創センターが主体となってブースを出展し、越村俊一教授がSIP（戦略的イノベーション創造プログラム）にて研究開発を進めている「津波デジタルツイン」のコンセプトや最新の研究事例についてポスター展示を行いました。刻々と進行する災害状況をサイバー空間に取り込み、そのプロセスと結果をリアルタイムで推定し、いち早く配信することで、災害対応機関の効率的な救助と避難行動につなげること、人命を救うシステムを目指し開発を進めていることなどを伝えました。このほか、今年1月に発生した令和6年能登半島地震直後に、モバイル空間統計を用いた人流解析からとらえた人の動き（避難行動）の分析（永田彰平助教）や、災害時、あるいはイベントなどにより通常とは異なる人流から異常を検知し災害暴露人口を推定する研究（マス・エリック准教授）、リモートセンシングにより建物被害を迅速・広範にとらえて最新のAI技術を用いた手法により被害状況を判定する研究（アドリアノ・ブルーノ准教授、ユアン・ウェイ准教授）について紹介しました。ブースでの対応は、武田百合子学術研究員と桑原直道クロスアポイントメント特任准教授が担当しました。

また、越村教授は楠浩一教授（東京大学地震研究所）とともに「Digital Twin Paradigm for Disaster Resilience」と題しテクニカルセッションを開催しました。デジタルツインは、AIや機械学習を用いたモニタリングとシミュレーション、被害予測により、被災地とのリアルタイムでの対応を劇的に向上させ、災害対応と復興に大きく貢献するシステムであることを発表しました。会場では、デジタルツインに関する実効性や社会実装へ向けての取り組みについてディスカッションが展開されました。これまでの府省や分野の枠を超えての情報の共有、開発者だけではない災害対応者、実務家、そして自然災害のさまざまな分野からの参加によって、社会のレジリエンスを強化するツール「災害デジタルツイン」として社会実装する将来展望についてお伝えすることができました。

文責：越村俊一、武田百合子（災害レジリエンス共創センター）
（次頁へつづく）



オープニングセレモニー会場の様子
 UR2024 のテーマ



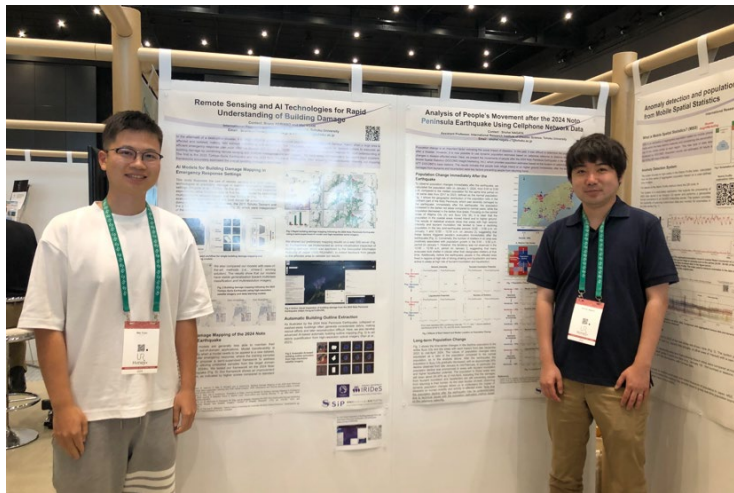
世界 135 ヶ国から 1500 人以上が
 参加しました



テクニカルセッション会場の様子



セッションで発表する越村教授（左）と楠教授



ブースでのポスター発表の様子（ユアン准教授（左）と永田助教）



TikToker からの取材を受ける越村教授
 動画配信もありました



展示会場には VR+地震座布団による地震体験
 コーナーもありました

